

Jリーグチームをフィールドとした体験学習プログラムの ジェネリックスキル評価

行實鉄平 佐藤充宏

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

1. はじめに

近年、大学教育における「グローバル化(大学の世界標準化)」や「ユニバーサル化(大学の全入化)」の進展は、その質保証という観点から、「何を教えるのか」ではなく、「何ができるようになるのか」、すなわち、学生の学習成果(アウトカム)に焦点をあてた教育内容や方法の検討・改善を迫っている。これは、経済産業省(2006)が打ち出す「社会人基礎力」や、厚生労働省(2006)の「就職基礎力」、中央教育審議会答申(2008)が定義する「学士力」といった、いわゆる、汎用性のある技能としての「ジェネリックスキル(以下、JS とする)」を大学教育の中でいかに養成していくのかという取り組みに他ならない。

しかしながら、この JS の評価は、従来の授業における知識習得に関する評価ではなく、創造力やコミュニケーション力など、多角的な資質・能力要素をいかにアセスメントしていくのかといった課題が指摘されている(清水、2012)。

翻って、体育・スポーツ科目は、身体活動を伴い、学生同士の協働を生み出す体験学習の機会を数多く設定できることから、学生の主体性、能動性、協働性などを育みやすい科目であると考えられる。しかしながら、これまで学生のキャンプ実習(築山ら、2008、青木ら、2012)やインターンシップ実習(深津、2012)といった活動と社会人基礎力との関係に関する研究は散見されるものの、JS との関係に言及する研究は皆無に等しい。

そこで、本研究では、大学におけるスポーツを通じた体験学習プログラムの成果と課題を抽出するために、具体的には、Jリーグ(プロサッカー)チームをフィールドとした体験学習プログラム(試合運営サポート活動)を開発・実践し、同プログラムを JS の観点から評価することとした。

2. 研究方法

(1) 授業(体験学習プログラム)の実施

徳島大学の授業として、1、3年生を対象にJリーグ(徳島ヴォルティス)チームの試合運営サポート活動を実施した。同プログラムは、「ホップ:業務内容を知る(1回目)」、「ステップ:接客対応を知る(2回目)」、「ジャンプ:企画に挑戦する(3回目)」と段階的に業務レベルを上げていく三部構成で現場学習を行ったが、試合前には、大学の教室で教員やチームスタッフによる座学(チームの歴史や接客方針、ホームタウン活動についての説明会)も実施した。また、大学の教室では座学だけでなく、学年混合の少人数グループ(3~4名の8グループ)をつくり、グループワークやプレゼンテーションの機会を数多く設定した。なお、本授業の受講者は、1年生が15名、3年生が13名の合計28名であった。

表1 体験学習プログラムの概要

内容項目	1回目(ホップ)	2回目(ステップ)	3回目(ジャンプ)	
事前説明会	日時	2015年4月24日(金)10:30 ~12:00	2015年5月15日(金)10:30 ~12:00	2015年6月19日(金)10:30 ~12:00
	内容	チームおよび試合企画についての説明	接客態度・技術の紹介、目標設定、サポートスタッフ制度紹介	参加学生より代表取締役社長に企画についてプレゼンテーション
当日内容	日時	2015年4月29日(水・祝)14:00	2015年5月24日(日)14:00	2015年7月12日(日)18:00
	対戦(結果)	徳島vs大宮戦(△0-0)	徳島vs札幌戦(●1-2)	徳島vs北九州戦(●0-1)
	天気	曇、弱風	晴、弱風	雨、強風
	観客数	4,316人	4,595人	3,979人
活動内容	入場口、プレイバーク、総合案内、グッズ売場	入場口、プレイバーク、総合案内、グッズ売場、イベント対応	フェイスベント、うちわ、応援フラッグ作成、入場体験企画	

(2) ジェネリックスキル要素の措置

本授業では、「主体的に考える力の育成」をめあてとして設定した。ここでいう考える力とは、「お客様は何を求めているのか」「どうやったら楽しい時間を過ごしてもらうことができるのか」といったような、答えのない問への挑戦を経て、彼らに育まれるであろう課題解決力を含意している。また、授業では、「1. 自分の意見を自分で表現できる。2. 自分たちで考えた企画をみんな協力して実践できる。3. スポーツの社会的機能(役割)について理解できる。」といった具体的な3つの到達目標を設定している。

清水(2012)を参考に、そこから導き出される「①表現力」「②企画力」「③協働力」「④実践力」「⑤スポーツ社会機能の理解力」の5要素を本授業を通して育まれるJS要素として指定した。また、各JS要素を測定する項目を2つずつ設定し、合計10項目をもってJSの測定を試みた。また、各測定スケールには、リッカート型尺度の5段階評定を用いた。さらに、その数量化にあたっては、5段階評定順にそれぞれ5、4、3、2、1の得点を与え、これらの段階は間隔尺度を構成するものと仮定した上で各種分析を進めた。

(3) データ収集

受講者を対象に質問紙調査を実施した。具体的には、「ステップ」から「ジャンプ」において業務難易度が大幅に高まることを考慮して、「ステップ」終了後(活動前)と「ジャンプ」終了後(活動後)の2回の調査を行い、JS要素の変化を検討した。有効回収標本数(回収率)は、28(100%)で、「性別」は「男子14名」(50.0%)、「女子14名」(50.0%)、「学年」は「1年生15名」(53.6%)、「3年生13名」(46.4%)であった。

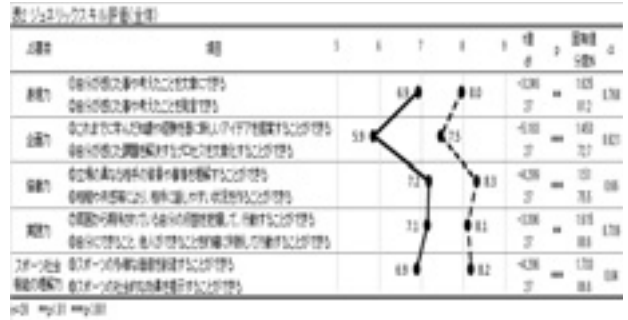
(4) 分析方法

測定項目の信頼性および妥当性を検証するために、各JS要素で主成分分析を行うとともに、クロンバックα係数を算出した。その結果、主成分分析では、第一主成分のみが抽出され、固有値は1.453~1.733、分散は72.7%~86.6%、α係数は.621~.840であったことから、項目を削除することなく分析を進めた(表2参照)。次に、活動前・後におけるJS要素の変化を検証するために、各要素2項目の合計得点を算出し、活動前・後について「全体」、「性別(男性、女性)」、「学年(1年生、3年生)」による平均値の比較を行った。その際、有意差検定にはt検定を用いた。

3. 結果・考察

(1) 全体

表2は、活動前・後のJSの変化を示したものである。すべてのJS要素において活動前よりも活動後においてポイントが高い傾向となった。



(2) 各特性別にみるジェネリックスキル評価

性別および学年別におけるJS要素の変化を分析したところ、まず、性別においては、女子よりも男子において多くのJS要素の変化を確認できた。具体的には、男子は、表現力、企画力、協働力、実践力の4つの要素が高まっており、女子は、企画力、協働力、スポーツ社会機能の理解力の3つの要素での高まりが確認できた。次に、学年においては、3年生よりも1年生において多くのJS要素の変化を確認することができた。具体的には、1年生は、すべてのJS要素で高まっており、3年生は、協働力、スポーツ社会機能の理解力の2つの要素での高まりが確認できた。以上の結果から、1年生の男子においては、特にJSの高まりが想定されよう。また、他の諸特性における詳細な分析結果・考察は、口頭発表で報告したい。

表3 ジェネリックスキル評価(学年別)

項目	1年生(n=15)						3年生(n=13)							
	pre		post		t検定		pre		post		t検定			
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	6.93	1.34	8.07	1.03	-2.915	14	*	6.92	1.38	7.85	1.28	-1.720	12	n.s.
企画力	5.60	0.99	7.67	1.05	-5.998	14	***	6.15	1.14	7.23	1.24	-2.103	12	n.s.
協働力	7.13	1.25	8.13	1.19	-2.958	14	**	7.23	1.48	8.54	1.20	-3.045	12	**
実践力	6.93	1.10	8.13	1.06	-3.674	14	**	7.38	1.12	8.08	0.95	-1.426	12	n.s.
スポーツ社会機能の理解力	6.60	1.18	7.87	1.55	-3.30	14	**	7.23	1.42	8.54	1.27	-2.694	12	*

*p<.05 **p<.01 ***.001 n.s.no significance

表4 ジェネリックスキル評価(性別)

項目	男子(n=14)						女子(n=14)							
	pre		post		t検定		pre		post		t検定			
	M	SD	M	SD	t	df	p	M	SD	M	SD	t	df	p
表現力	6.79	1.31	8.14	1.17	-3.387	13	**	7.07	1.39	7.79	1.12	-1.439	13	n.s.
企画力	5.57	1.09	7.21	1.31	-3.452	13	**	6.14	1.03	7.71	0.91	-3.782	13	**
協働力	7.14	1.23	8.07	0.92	-2.879	13	*	7.21	1.48	8.57	1.40	-3.177	13	**
実践力	6.79	0.97	8.00	1.11	-3.631	13	**	7.50	1.16	8.21	0.89	-1.546	13	n.s.
スポーツ社会機能の理解力	7.00	1.36	7.93	1.64	-2.120	13	n.s.	6.79	1.31	8.43	1.22	-4.101	13	***

*p<.05 **p<.01 ***.001 n.s.no significance

4. 今後の課題

1 授業によるJSの醸成には限界があることから、大学カリキュラム全体との学習内容の体系化(位置づけ) 今後は検討する必要がある。